

市町村立図書館の皆様へのメッセージ

復興から再生へ

～ 図書館が紡ぐ絆 ～

岩手県立図書館
館長 酒井 久美子



希望の春を一瞬にして暗転させ、奈落の底へと突き落としたあの震災は、私たちに多くの問題を投げかけました。その最たるものは、自然への畏怖をいつしか忘れ、科学万能を信じた人間の思い上がりに対する警鐘です。これまで追求してきた物質文明、いわゆる経済至上主義によるカネやモノによる繁栄が如何に脆いものであったかを誰もが痛感し、否応なしに価値観の転換を迫られました。しかし、その新たな道を模索する苦しみの過程にあって、元来人間に備わっているたくましさや優しさ、すなわち自助と共助の精神の発揮を随所で確認できたことは、望外の喜びでありました。それが人と人との強い絆を生み、やがては明日に向かって人々が共に進む大きな原動力となったことは、先刻ご承知のとおりです。

図書館にもそれは当てはまります。この1年、被災した図書館の復興支援に多くの方々が力をお貸しくいただきました。県内にとどまらず全国あるいは海外から寄せられたご厚意、そして図書館人としての強い使命感に基づくたくましい実践力や広範なネットワークに支えられ、多くの図書館はその機能を回復させつつあります。今後の課題は、この震災を経験した後の図書館のあり方を原点に立ち返って考えることでありましょう。それは、もはや復興を越えた再生への道程でもあります。

「地域の情報拠点」として、かけがえのない歴史や文化の継承に、そして地域づくりに図書館はその役割をどのように果たしていくのか・・・ここでも「連携の力」が改めて問われていると考えます。

再び巡ってきた春。被災地では復興の槌音の響きが高まる一方で、諸課題が山積しているとも伺っております。当館としましても、復興の過程を注視しながら時宜に適った支援に努め、それぞれの特性を活かした地域住民の役に立つ図書館づくりに寄与したいと願っております。各館におかれましては、引き続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

図書館から希望と元気を発信！

～ 目から鱗が落ちる話など二話 ～

岩手県立図書館指定管理者
総括責任者 菊池 敏雄



「目から鱗が落ちる」ということばは聖書が出典なそうです。これまでの人生で、一度だけ目から鱗が落ちたことがあります。「生涯学習社会の反対語は何ですか」。あれは三年前、とある図書館関係のセミナーでの講師から聴衆への質問です。誰も答えることができませんでした。「それは学歴社会です。生涯学習社会を実現するために図書館はあるのです」。図書館員になって良かったと心から思えた瞬間でした。

『これからの図書館像』（文部科学省・2006）を読み進めたときの感動が甦りました。前日図協理事長の竹内愨さんが、「図書館は人の而立を助ける場所である」と述べられていることも重なりました。

もう一つは「目に鱗ができる」というお話。昨年11月、横浜でのシンポジウムで、溝畑宏観光庁長官と同席する幸いをいただきました。長官は、「これからニッポンを元気にして、震災で助けてくれた世界中の人びとに恩返しするんや！」と力強くおっしゃっていました。図書館の地域資料が地域を活性化し日本を元気にするというのです。「悲しいニュースがつづく日本をもう一度光り輝く国にしたい！そのために図書館にできることがたくさんあるはず」というのが熱血長官のメッセージです。

「図書館は希望のフィールドである」。私が考える図書館のミッションです。2010年11月のビジネス支援コーナー、昨年10月の震災関連資料コーナー設置もそんな思いからです。希望に元気が加わって、「図書館から希望と元気を発信！」がどうやら新テーマとなったようです。どのように発信するかは皆様のお知恵を拝借して。そして再び「目から鱗が落ちる」日が来ることを信じて。